

国際的な視野を持ち，円滑にコミュニケーションを 図ろうとする生徒の育成：『創造的な学び』を通 して

著者	東 佑樹，山内 誠，入江 将紀，牧 俊輔
雑誌名	鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要
巻	28
ページ	323-332
発行年	2019-03-29
URL	http://hdl.handle.net/10232/00030594

国際的な視野を持ち、円滑にコミュニケーションを図ろうとする生徒の育成

－『創造的な学び』を通して－

東 佑 樹 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

山 内 誠 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

入 江 将 紀 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

牧 俊 輔 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

A study for improving students' communication skills based on the creative learning

HIGASHI Yuki, YAMAUCHI Makoto, IRIE Masanori and MAKI Shunsuke

キーワード：タスク、即興性、能動性、協働、海外の姉妹校との連携

1. 緒言

本校では、平成25年度から6年間にかけて「自らよりよい未来を創る生徒の育成」を研究テーマに掲げ、全校体制で研究を進めてきた。「自らよりよい未来を創る生徒」を育成するためには、能動性や独自性を発揮することや仲間と協働することに重点をおき、創造的に考える力や創造的に考えようとする態度を育む学びが必要となる。このような学びを「創造的な学び」とし、本校英語科においても指導法の研究を行った。これは、6年間の研究とその実践のまとめを報告するものである。

2. 研究主題とそのとらえ

2.1 研究主題

国際的な視野を持ち、円滑にコミュニケーションを図ろうとする生徒の育成
－『創造的な学び』を通して

2.2 研究主題のとらえ

「国際的な視野を持ち、円滑にコミュニケーションを図ろうとする生徒」を次のように定義する。

- ・ 身に付けた知識及び技能を、実際のコミュニケーションの場で活用することができる生徒
- ・ まとまりのある文章を通して自分の考えを相手によりよく伝えたり、相手の考えをよりよく理解したりすることができる生徒
- ・ 授業や実際のコミュニケーションに好奇心を持って自ら積極的に取り組むとともに、身に付けた力を実感し、失敗を恐れず、自信を持って実際のコミュニケーションに取り組むことができる態度を身に付けた生徒

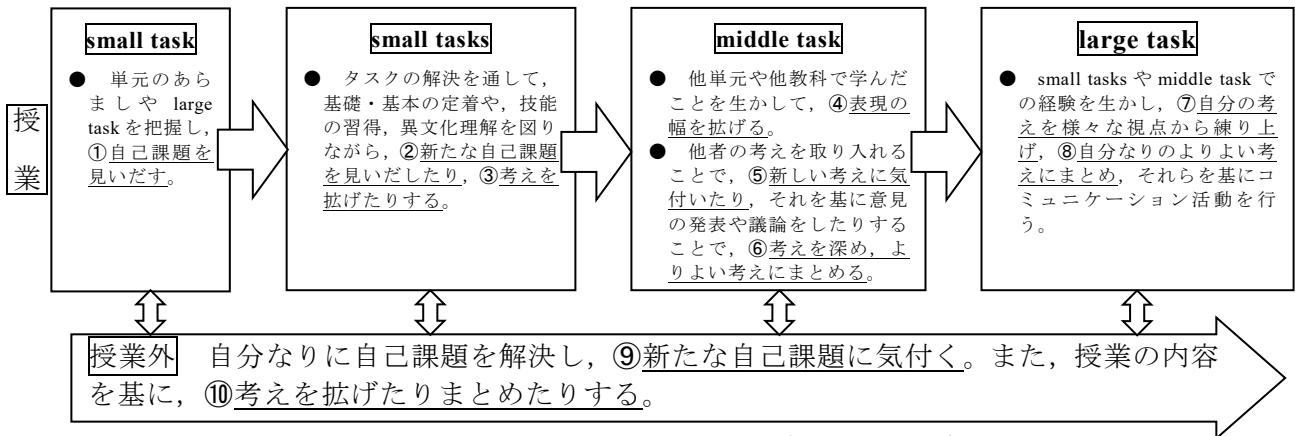
3. 研究の構想

上記に挙げたような生徒を育成するために、本校英語科では「創造的な学び」として、次のような指導を実践した。

3.1 「創造的な学び」を支える3つの活動

本校英語科では、「創造的に考える力」と「創造的に考える態度」の2つを合わせて、「円滑なコミュニケーション能力」と捉えており、その「円滑なコミュニケーション能力」を育むための学習活動が「創造的な学び」であると考えた。そして、本校英語科における「創造的な学び」は、単元全体や授業全体を通して行われるものであり、決して一単位時間の授業や、特別に設定された学習活動において、単発的に行われるものではないと捉えた。

よって、「創造的な学び」を支える3つの活動である、「手がかりを見いだす活動」「考えを拡げる活動」「よりよいものへまとめる活動」という3つの活動を、各言語活動に区分することは難しいと考え、図1の①～⑩に示されるように、「創造的な学び」を支える3つの活動が統合的に取り入れられるよう、単元構成や授業設計、各言語活動を工夫することにした。



【図1 本校における単元の基本的な構成と「創造的な学び」との関係】

3.2 能動性と独自性の発揮

本校英語科では、能動性を発揮している姿、独自性を発揮している姿を次のように捉えた。

○ 能動性を発揮している姿

生徒が large task に向かって自ら課題設定を行い、英語の授業だけにとどまらず、授業時間外の学習においても、絶えず能動的に情報収集や試行錯誤を行い、創造的な思考や表現に結び付けている姿

○ 独自性を発揮している姿

他教科で学習した内容や高等教育などで用いられている考え方などに触れたり、他者の意見や考えを聞いたり、議論したりする中で得られた情報や知識と自分の知識・技能や経験を組み合わせ、新たなアイデアを生み出すことができる姿

そこで、能動性を発揮させるために、課題設定や解決を繰り返し実践したり、目標を達成できているのか確認したりしながら、自己調整できるような授業設計の工夫などを行う必要があると考えた。また、独自性を発揮させるためには、生徒自身がどのような姿が独自性を発揮している姿であ

るかを理解する必要があると考えた。そこで、ICEモデルを用いたルーブリックシート（以下、ICERルーブリックシートと呼ぶ）を生徒と共有し、教師だけではなく、生徒自身も自らが身に付けた知識・技能や経験を評価するための工夫をすることとした。そうすることで、生徒自らが、積極的に言語活動に取り組み、多様で異質な考えや情報などから必要な内容を選択したり、組み合わせたりすることができる考えた。

3.3 協働の視点

「円滑なコミュニケーション能力」をより高めるためには、複数の学習者において役割と責任感を持たせた上で、よりよい考えや意見を生み出す「協働的な言語活動」に取り組みせることが有効だと考える。そこで、本校英語科では、「協働の視点」として、以下のことが重要であると考えた。

心理的側面 「責任感」「協力心」

よりよい考えやものを創り出すという目的に向かって、二人以上の生徒がそれぞれの役割に責任を持って協力し合うこと。

行為的側面 「補完」「組み合わせ」

よりよい考えやものを創り出すという目的に向かって、二人以上の生徒が互いに知識・技能や経験を補ったり、組み合わせたりすること。

協働的な活動では必ず各メンバーに役割がなければならない。それは一部の生徒の意見や考えに偏ったものにならないようにするためである。なぜならば、よりよいものを創り出すには、議論を重ね、様々な見方や考え方、情報、知識などを選択したり、組み合わせたり、補い合ったりしなければならないからである。このように、活動を活性化させるためには、それぞれのメンバーの考えや情報、知識、さらに、独自の経験などが無いと解決できないようなタスクにすることも必要と言える。

さらに、各グループのリーダーを育成し、議論の進行をさせる中でメンバーの意見を引き出したり、賛否を求めたりすることで、さらに拮据りが生まれ、活発な言語活動となる。そこで、本校英語科では、「協働的な言語活動」として、主にジグソー学習を取り入れることで、多様で異質な情報を生徒に与え、ホームグループとエキスパートグループに分かれ、それぞれが責任を果たすことで新たな考えを創り出すことができ、円滑なコミュニケーション能力の育成に繋がると考えた。

4. 研究の実践

4.1. 「創造的な学び」を支える3つの活動

(1) タスク設定の工夫

本校における英語の授業は、タスクの達成に向けて構成されている。本校ではタスクを、「単元を通して、または一単位時間ごとの学習目標達成を目指して設定される言語活動を伴った課題」と捉えてきた。生徒は、タスクを達成する中で、自他の考えや意見を挙げたり、深めたり、まとめるたりすることを求められ、それが「創造的な学び」を支え、円滑なコミュニケーション能力の育成に繋がると考えた。次は、本校が考えるタスクを設定する際の留意点である。

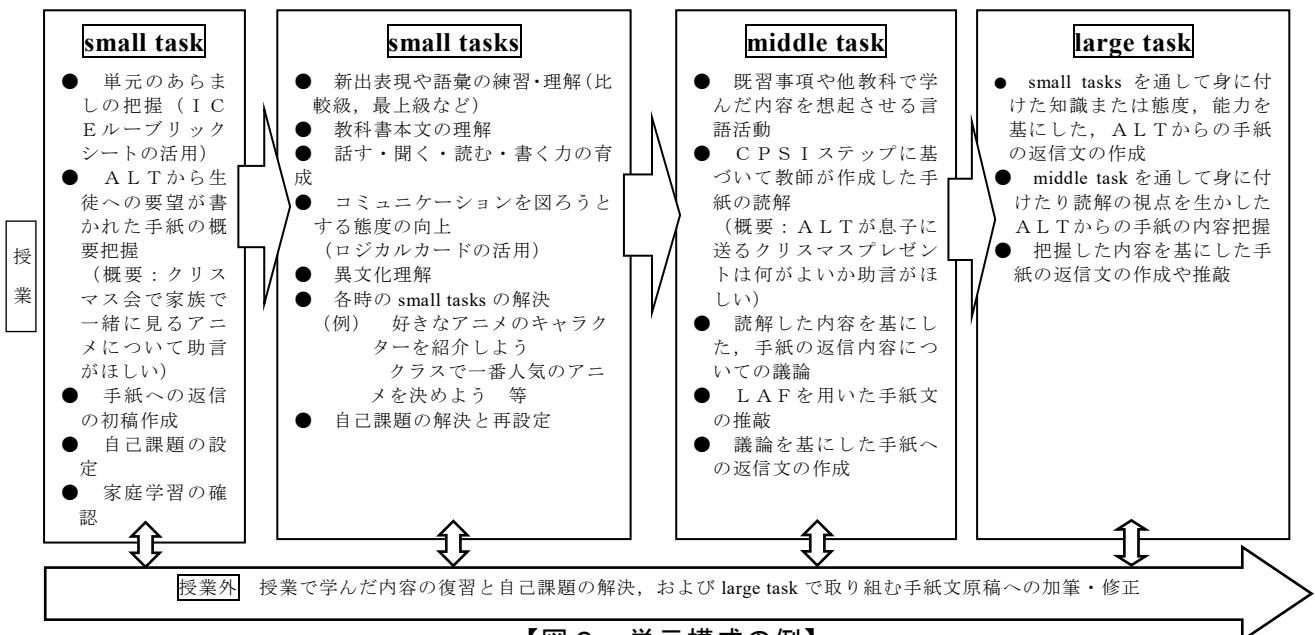
【表1 タスクを設定する際の留意点】

ア	単元の中で、それぞれのタスクが関連し合っているか。
イ	そのタスクを成功させるために、生徒の知識・技能や経験が必要となっているか。
ウ	生徒にとって身近な話題であったり、海外の実際の資料や情報等を扱っていたりしているか。
エ	そのタスクを達成するまでに、生徒自身が試行錯誤するような場面が設定されているか。
オ	そのタスクを通して身に付けた知識・技能や経験、また、態度は、次の単元や他学年等と関連してくかが明らかか。

また、それぞれのタスクは単元を通して達成すべき large task, large task を達成するために必要な課題を解決していく small tasks, また、表1のイやオの考えに沿って、既習事項の活用を促すための middle task として生徒に提示した。

例えば、図2の様に構成された単元において、生徒たちは単元の1時間目に large task の解決までの見通しを持つことで、自己課題を解決することや、タスクそのものを解決することに意欲をもちながら授業に臨むことができた。そして、その後の small tasks を通して、新出の表現や既習事項を活用したり、様々な情報を組み合わせたりして言語活動に取り組むことで、large task の解決のために必要な知識や技能等を多面的に身に付けることができた。さらに、躓きや不安を感じる場合でも、対話や議論を通して級友と協力したり試行錯誤したりしながら、タスク達成に臨むことができた。また、middle task においては、その単元において学んだ新出表現のみならず、既習事項や他教科で学んだ内容等の活用も図りながら、意欲をもって large task の解決に臨むことができた。そして、large task においては、単元を通して学んだことや既習事項、他教科の内容等を基に、自分なりの表現を行いながら、タスクの解決に臨んだ。さらに、単元の1時間目に、後述する ICE ルーブリックシートを配付し活用させることで、生徒は自己課題の解決を授業のみならず毎日の家庭学習でも取り組むようになった。

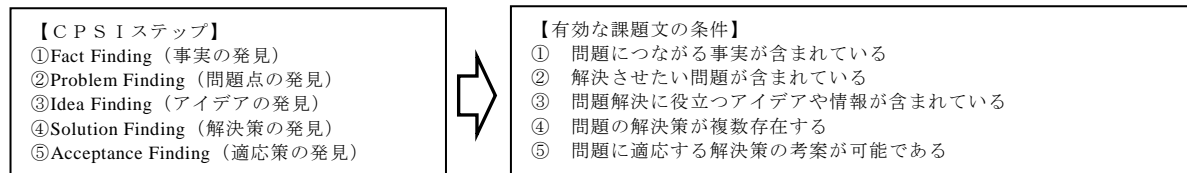
large task ニック先生におすすめのアニメを紹介しよう。



【図2 単元構成の例】

(2) CPSIステップを活用した課題文作成の工夫

図2で示したような large task を解決させる中で、より円滑なコミュニケーション能力を高めるには、生徒に最適な制約（相手の意向や置かれた状況など、生徒の試行錯誤を促す情報）がかかった表現活動を行わせることが有効だと考えた。最適な制約を与える際には、創造教育財団が問題解決のステップとして提案する図3のようなCPSIステップに基づき課題文を作成したり、情報を与えたりすることが有効である。



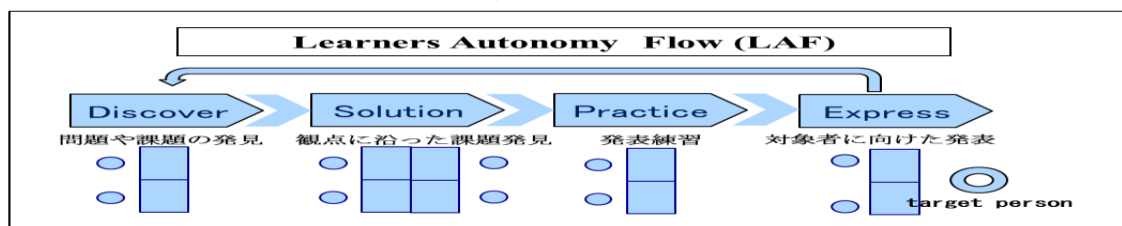
【図3 CPSIステップを活用した課題文作成】

4.2. 能動性・独自性を育む指導と評価の工夫

(1) 能動的に自己課題設定を行わせる指導と評価の工夫

ア 「LAF」を用いた自己課題設定

能動的に自己課題設定を行わせるための工夫として、本校英語科が独自に考えた次の図4のような学習形態「Learners Autonomy Flow（以下、LAF）」を用いた。



【図4 Learners Autonomy Flow (LAF) のイメージ】

「LAF」を用いることにより、緒論で述べられている自己課題設定に必要な「インプット」「プロセス」「アウトプット」の3つの段階を絶えず繰り返すことができ、よりよい自己課題設定が可能になると考えた。具体的には、まず、台北教育大実習生や大直高級中の生徒といった対象者に向けた発表を通して生じた問題を把握する（「インプット」の段階）。次に、生じた問題について、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「外国語表現の能力」「外国語理解の能力」「言語や文化についての知識・理解」の4つの視点を基に、それらの問題の解決に向けた課題を発見する（「プロセス」の段階）。さらに、発見した問題の解決を図るための練習（「アウトプット」の段階）に取り組んだ後、再び対象者に向けて発表する。それでも解決に至らない問題を、本単元を通して解決すべき問題と捉え、それらの問題の解決に向けての手立てを自己課題として設定している。

イ 「LAF」を用いた自己課題設定（実践例）

実際の授業においては、前単元の最終時に、次単元への見通しとして、「台北教育大実習生にお気に入り映画を紹介しよう」という large task を設定した。

まず、生徒は、第1時に、家庭学習において、既存の知識や技能を活用して作成してきた原稿を基に、台北教育大実習生にお気に入りの映画紹介を「LAF」を用いて行った。その中で、「インプット」の段階では、1回目の発表を基に、「発音や英文の正確性」や「映画の内容に関する情報量の少なさ」、「相手の質問に即興的に応じることができないこと」等を問題として挙げていた。その後、「プロセス」の段階で、問題を解決するための手立てを設定し、「アウトプット」の段階において、実際に辞書や参考書で発音や文法を確認したり、教師や級友の助言を基に、相手の質問に適切に応じるための原稿修正や音読練習等を行った。その結果、2回目の紹介場面では、1回目より自信を持って表現する様子が見られた。また、相手の質問に適切に応じることができたり、相手の共感的な理解を得られたりしたことから、伝わった喜びを実感する様子が見られた。

以上のことから、「LAF」学習を通して、自ら発見した問題やその解決のための質の高い自己課題を設定させることができました。また、授業と家庭学習との繋がりや、自己課題と単元の中で身に付けるべき知識や技能との関わりを意識させることで、主体的な学びの実現に繋がった。

(2) 円滑にコミュニケーションを図る能力を育む指導と評価の工夫

ア ICEルブリックシートを用いた評価の工夫

表2は、本校英語科が考える large task における I, C, E の各段階を示した ICEモデルである。中学校学習指導要領の内容のまとめりごとの評価規準に盛り込むべき事項のうち、「言語活動の取組」や「正確な聞き取り、発話、音読、読み取り、筆記」、「言語についての知識や文化についての理解」を I 段階、「コミュニケーションの継続」、「適切な聞き取り、発話、音読、読み取り、筆記」を C 段階と定義している。そして、本校英語科が各単元の large task における協働的な言語活動を通して育みたいと考える「円滑にコミュニケーションを図る能力」を具体的な生徒の姿で示したものを E 段階としている。なお、I, C 段階は、「CAN-DO リスト」の形での学習到達度目標と同じ位置付けであることから、各単元の ICEルブリックシート作成にあたっては、本校英語科が現在活用している「CAN-DO リスト」との関連を図りながら、表2の ICEモデルに従って分類している。

【表2 本校英語科が考える large task における ICEモデル】

I	C (=I+C)	E (=I+C+E)
○ 各単元で身に付けるべき基礎的・基本的な知識・技能を習得する段階 【評価の視点】 ・ 言語活動への取組 ・ 正確な理解・表現 ・ 言語についての知識や文化についての理解	○ 推論や比較を通して、各単元で身に付けるべき基礎的・基本的な知識・技能と既習事項とを統合する段階 【評価の視点】 ・ コミュニケーションの継続 ・ 適切な理解・表現	○ これまでに身に付けた知識・技能や経験を生かして、実現可能な提案をしたり新しい価値を創造したりする段階 【評価の視点】 ・ 能動性 ・ 論理性 ・ 即興性 ・ 独創性 ・ 一貫性 ・ 流暢性 等

イ ICEルーブリックシート作成（実践例）

導入時に示したICEルーブリックシートを、各small taskにおいて、生徒の言葉に置き換えさせながらその共有化を図り、何ができるようになればよいのかといった理想の姿を持たせる工夫を行った。理想の姿の示し方については、教師が教科書本文を基本としながら、生徒に活用させたい表現を用いて、モデルスピーチ等を示したり、ALTとの連携を図りながら、完成例を映像として示し、それらに含まれるポイントに気付かせたり、海外のプレゼンテーションを取り扱った動画などを活用して、プレゼンテーションの中で工夫すべき点などに気付かせたりした。そのことにより、生徒はより具体的に、単元を通して「できるようになるべきこと」を明確に理解することができ、理想と現状とを阻む問題を解決すべく自己課題を設定し、主体的な学びにつなげることができた。

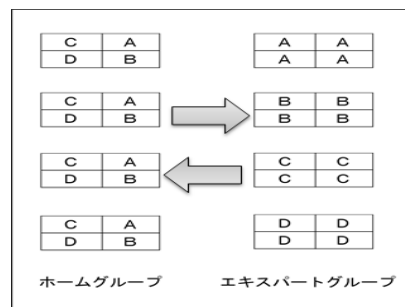
Unit 7 My Favorite Movie	large task I / C= (I+C) / E=(I+C+E)			
	コミュニケーションの場面・場面・場面	内容理解の観点	表現理解の観点	態度理解の観点
身近な映画やアニメーションを取り上げ、それについての特徴やシーンなどを紹介したり、また、映画などのあらすじを紹介したりしている。	<input type="checkbox"/> 目的の場面に必要な単語や表現を正確に使用している。 <input type="checkbox"/> 目的の場面に必要な単語や表現を正確に使用している。	<input type="checkbox"/> 目的の場面に必要な単語や表現を正確に使用している。 <input type="checkbox"/> 目的の場面に必要な単語や表現を正確に使用している。	<input type="checkbox"/> 目的の場面に必要な単語や表現を正確に使用している。 <input type="checkbox"/> 目的の場面に必要な単語や表現を正確に使用している。	<input type="checkbox"/> 目的の場面に必要な単語や表現を正確に使用している。 <input type="checkbox"/> 目的の場面に必要な単語や表現を正確に使用している。
0.9.20・学習活動	<input type="checkbox"/> 目的の場面に必要な単語や表現を正確に使用している。 <input type="checkbox"/> 目的の場面に必要な単語や表現を正確に使用している。	<input type="checkbox"/> 目的の場面に必要な単語や表現を正確に使用している。 <input type="checkbox"/> 目的の場面に必要な単語や表現を正確に使用している。	<input type="checkbox"/> 目的の場面に必要な単語や表現を正確に使用している。 <input type="checkbox"/> 目的の場面に必要な単語や表現を正確に使用している。	<input type="checkbox"/> 目的の場面に必要な単語や表現を正確に使用している。 <input type="checkbox"/> 目的の場面に必要な単語や表現を正確に使用している。
自己課題	改善方法		結果	
<授業を通して>				
<発表を通して>				
<今日の授業を通しての課題>				

【図5 ICEルーブリックシート】

4.3 「協働」の視点を取り入れた指導の工夫

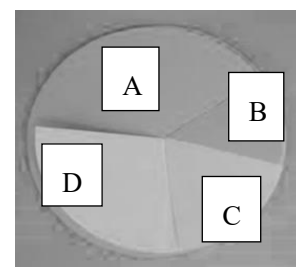
(1) ジグソー学習（実践例）

ジグソー学習は、アメリカの社会心理学者であるエリオット・アロンソン（1994）が開発した学習法であり、本校英語科では、この学習法を参考に、協働的な言語活動の一つとして位置付けて研究を行った。基本的な流れとしては、図6のように、まず、ホームグループで与えられた課題の解決に向けたA～Dの役割を決め、それぞれが同じ役割をもったエキスパートグループに移動して、責任を持って情報を集め、その情報をホームグループに持ち帰る。そして、それらの情報を組み合わせたり、補完したり（協働の視点）して、それぞれのメンバーの合意形成を基に一つの結論を出す。このように、ジグソー学習の手法を取り入れることで、生徒一人一人が活動に対する自らの役割と責任（協働の視点）を自覚させたいと考えた。



【図6 ジグソー学習における学習形態】

その上で、生徒に互いの知識・技能を基に、各グループで協働的に関わらせ、よりよいアイデアを練り上げることができると考えた。さらに、合意点を探るための話し合いを活性化させるための手立てとして図7の「コンセンサスサークル」の活用が効果的であると考えた。これを用いることで、個人の考えや意



【図7 コンセンサスサークル】

見がグループにどのように反映されているかを可視化することができる。活動の様子を俯瞰し、進捗状況を客観的に把握したり、教師やチームリーダーは合意点を決定する際に、多数意見に批判的な考えや意見を与えたり、少数意見を積極的に引き出したりすることで、知的コミュニケーションの活性化を図った。

【表3 本校英語科におけるジグソー学習のステップ】

学習の流れ		活動の目的	実際の活動	
			large task 「附属中の価値ある伝統を紹介しよう。」	
Step1		<ul style="list-style-type: none"> エキスパートグループ活動に向けて課題解決のための役割等を十分に理解できている点とできていない点を明確にさせる。 	1 チームリーダーを中心に、「掃除文化」を取り上げ、将来、校内の掃除はだれがすべきかを定めるという目的・対象・方法を明らかにし、情報収集のための役割分担を行う。 【チームリーダーの役割】 ○進捗管理 ○外部知 ○メンバー支援 ○環境づくり等 ※ 役割については、授業外での指導も行う。	
Step2	 	<ul style="list-style-type: none"> 各エキスパートグループにて、互いに協力しながら、自分なりの意見に対する理由や根拠を明確に持てるようにさせる。 ※ 各エキスパートグループでの活動(対象) A インターネット電話(台北教育大生) B 電話(鹿児島大学生) C ビデオレター(台北教育大生) D 手紙(A L T) 	1 エキスパートグループ内のチームリーダーを中心に4技能を統合的に活用しながら、ホームグループの目的に必要な情報を収集していく。 ※ 傾聴の視点から、与える情報作成にC P S Iステップを活用し、情報の背景にまで目を向けさせる。 ※ 獲得した情報をキーワード化(要約)して、ホームグループ内で、情報の復元をさせる。 【内容理解を確認する教師の関わり】 ① 事実発問 ② 推論発問 ③ 評価発問 ※ A～Dの活動によって獲得した情報を深く理解させたり、理解を確かめたりする。 2 協働の視点(心的側面:協力・責任)を大切にす。英語の苦手な生徒も、協力することで自信を持ち、ホームでの役割から、責任感を感じ取らせる。	
Step3	 	<ul style="list-style-type: none"> ホームグループにおいて、リーダーを中心とし、グループのメンバー全員の意見を反映させ、合意形成を図らせる。 	1 チームリーダーを中心に、持ち寄った情報を比較したり、批判したりしながら、コンセンサスサークルを用いて合意形成を図らせる。 ※ 知的コミュニケーションの状況を可視化することで、教師は支援的に関わったり、批判的に関わったりすることで、試行錯誤を促させる。チームリーダーもまたこの役割を担う。 2 持ち寄った情報(キーワード)を示しながら、簡潔にやりとりを行わせる。 ※ Kiss (Keep it Short and Simple)を意識させ、相手が理解しやすいように簡潔に表現させる。 ※ 「推論する」「引き出す」「要約させる」質問や表現などを用いさせ、知的コミュニケーションを活性化させる。 例 You mean... / Sorry, in easy way please... 3 協働の視点(組み合わせ・補完)を大切にする。 ※ 持ち寄った情報を組み合わせたり、補完したりして新たな考えを見いださせる。	

【合意形成が図られた考え】
 1 班：危険な箇所はロボット、その他は人間が作業をする。(安全性+効率化+学校への感謝を学ぶ機会)
 2 班：動物に掃除をさせる。(安全性+学校生活のストレス軽減のための動物セラピー) など

5. 研究実践からの気づき

- ・ タスク設定の際には、単にタスクを提示するのではなく、ALTや身近な外国人、または、外国の動画や実際の広告やポスターなどを用いて、生徒が実践的に英語を使ってコミュニケーションをとる必然性を感じ、コミュニケーションへの意欲をもたせる必要があると感じた。
- ・ 課題文作成だけでなく、資料の準備や発話の内容、授業構成など、授業全般において、このCPSIステップを用いることで、生徒の思考錯誤を促すことができた。
- ・ ICEループリクシートを活用して、理想の姿を明確にさせた後、middle taskにおいて再度「LAF」学習を行わせたところ、生徒同士のアドバイスや個人の課題設定に広がりや深まりが見られた。つまり、「LAF」学習を複数回設定することや理想の姿を共通理解することがよりよい学びへとつながると考える。
- ・ 理想の姿を見いだすことは難しく、何をもって良いとするかを考える必要があり、教師自身が高い意識を持って、英語と向き合ったり、教科書題材の分析を深く行ったりする必要がある。つまり、設定する理想の姿が高まらなければ、生徒がそれ以上に伸びる可能性は低くなってしまふといった意識を教師自身が持つ必要がある。
- ・ 最終的にインターネット電話を活用し、台北教育大実習生に発信したところ、驚きと共に共感的な反応が得られた。しかし、今後は更に批判的な反応をしてもらうことで、よりよい考えへと試行錯誤が継続され創造的に考える力や態度の育成につながると考える。
- ・ 他者の考えに傾聴しすぎると、独自性を失う可能性が高いため、本活動の後に必ず個に戻し、スピーチ原稿作成等を行わせ、様々な考えや意見を基に自分の中での合意形成を図らせる必要がある。また、その文章や発表からICEループリクシートを活用した評価を行う必要がある。

6. 終わりに

「創造的な学び」を研究、実践していく中で、教師が生徒のどのような力を伸ばしていきたいかを明確に把握することが大変重要であると再認識した。そして、生徒自身にも理想とする姿をイメージさせることが学びに向かう力を高め、よりよい学びとなっていく。生徒の主体的な学びが継続して実践できるよう、これからも生徒の実態に合わせて新たな指導法を模索していきたい。

〈参考文献〉

- ・ 鹿児島大学教育学部附属中学校(2012)：自己を発揮し、未来を拓く生徒を育成する授業づくり，鹿児島大学教育学部附属中学校
- ・ 影浦攻(1996)：新学力観に立つ英語科の授業改善，明治図書
- ・ 高橋誠編著(2002)：新編創造力事典，日科技連
- ・ 三浦孝，弘山貞夫，中島洋一著(2002)：だから英語は教育なんだ，研究社
- ・ 弓野憲一(2005)：世界の創造性教育，ナカニシヤ出版
- ・ 三浦孝，中島洋一，池岡慎著(2006)：ヒューマンな英語授業がしたい，研究社

- ・渡邊将志編著(2007)：論理力より創造力，講談社
- ・池田玲子，舘岡洋子編著(2007)：ピア・ラーニング入門—創造的学びのデザインのために—ひつじ書房
- ・文部科学省 (2008)：中学校学習指導要領解説 外国語編，開隆堂
- ・文部科学省 (2008)：小学校学習指導要領解説 外国語活動編，東洋館
- ・伊東治己編著(2008)：アウトプット重視の英語授業，教育出版
- ・江利川春雄編著(2009)：英語教育のポリティクス～競争から協同へ～，三友社
- ・木村博是，木村友保，氏木道人編集(2010)：英語教育学大系第10巻リーディングとライティングの理論と実践，大修館書房
- ・萬谷隆一，直山木綿子，卯城祐司，石塚博規，中村香恵子，中村典生編著(2011)
：小中連携 Q&A と実践 小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ40のヒント，開隆堂
- ・渡部良典，池田真，和泉伸一(2011)
：CLIL 内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第一巻 原理と方法，上智大学出版
- ・松村昌紀著(2012)：タスクを活用した英語授業のデザイン，大修館
- ・文部科学省大臣官房国際課(2012)：グローバル人材育成への取り組み『英語教育』第61巻第9号10-13頁，文部科学省
- ・和泉伸一，池田真，渡部良典(2012)
：CLIL 内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第二巻 実践と応用，上智大学出版
- ・江利川春雄編著(2012)：協同学習を取り入れた英語授業のすすめ，大修館
- ・文部科学省(2013)
：各中，高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達度目標設定のための手引き，文部科学省
- ・文部科学省(2014)
：英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会基礎資料，文部科学省
- ・大関浩美(2014)：フィードバック研究への招待，くろしお出版
- ・広島県立安芸高等学校(2015)：平成27年度アクティブラーニングガイド第6版，広島県立安芸高等学校
- ・白畑知彦(2015)：英語指導における効果的な誤り訂正，大修館
- ・望月昭彦他編著(2015)：英語4技能評価の理論と実践，大修館